

身代わり令嬢は

強面辺境伯の独占愛に満たされる

### プロローグ

「とても綺麗だ、マリア」

白いヴェール越しに、精悍な顔つきをした男——ジークハルト・カリウスは琥珀色の目を細めて言った。素直に花嫁を褒める言葉に、マリアの心臓が跳ねる。

(あなたも、とても素敵です)

暗めの赤い髪に黒衣の正装——辺境伯である彼が長としてまとめている騎士団の制服は、とてもよく似合っていた。鋭い光を放つ目に太くきりりとした眉、すっと通った鼻筋。薄い唇が弧を描くと、男らしい顔立ちがいつそう眩しく見える。隣に立つ自分が気後れしてしまうほどに。

彼は綺麗だと言ってくれたが、本当に変ではないだろうか。

(ううん。大丈夫。メイドや夫人たちも褒めてくださったもの)

それに——

『あなたはヒルデに似てとても可愛いから、きつと辺境伯様も気に入ってくださいるはずよ』

『ああ。ヒルデに似ているから大丈夫だ』

淡いピンク色の長い髪に、ぼつちりとした大きな青い瞳、小さな鼻の下にあるふつくらとした赤

い唇は、マリアを孤児院から引き取って育ててくれたリーデル伯爵夫妻から見れば、実の娘であるヒルデに似て大変可愛いらしい容姿なのだという。

だからこの結婚も上手くいくはずだと信じて疑わず、彼らはマリアを王都から送り出した。マリアも、育ててもらった今までの恩を返したい、二人の期待に応えたいと思っていた。

でも、いざ花婿となるジークハルトの隣で神父の唱える夫婦の誓いを耳にした途端、罪悪感に襲われた。

(わたしで、いいのかな)

本当なら、今ここにいるのはマリアではなく、ヒルデだった。

それなのに。

「――では、誓いの口づけをお願いいたします」

白いヴェールを持ち上げられて、マリアは不安そうな表情でジークハルトを見つめた。

このままでは本当に夫婦になってしまう。彼を騙したまま。

そう思った瞬間、マリアはこの先の行為を止めるかのように彼の手に触れていた。

「マリア。あなたを絶対に幸せにする」

花嫁の不安を取り除くような優しく力強い言葉に、マリアは目を見開く。

気がつけば触れた手をぎゅっと握りしめられ、そっとジークハルトに口づけられていた。

## 第一章 身代わりの人生

「マリア。それを片付けたら、院長室に来てください」

「はい、先生」

当時八歳だったマリアは、孤児院の中でも手のかからない良い子だった。

マリアとしては気が強い子や大人に怒られるのが怖くて大人しくしているだけだったが、優しい子だと事あるごとに言われて、自然とそう振る舞うようになったのだ。

小さい子どもの世話を積極的に手伝い、今も食べ終わった食器を片付けている最中だった。

「マリアお姉ちゃん。おままごとしよう」

「これ読んで？」

「ごめんね。院長先生に呼ばれているから、後でね」

マリアは心苦しく思いながらも小さい子どもたちの誘いを断り、院長であるザムエルの部屋へ向かった。

「先生、マリアです」

「ああ、入りなさい」

失礼します、とマリアが中へ入ると、そこにはザムエルの他に二人の男女がいた。

何度も着古してくたびれたシャツと毛玉だらけのスカート姿のマリアとは違い、彼らはバリッと糊の利いた上等な服を着ていた。帽子やアクセサリーもお洒落で、違和感なく身につけている。

丸顔でクマのような印象の男性は二十代のザムエルよりも年上で、鼻の下によく手入れされた綺麗な髭があった。

女性の方はほっそりとしたとても美しい人だったが、どこかやつれているような雰囲気だ。貴族の夫婦だろうか。なぜかマリアを食い入るように見てくるので、思わずたじろいでしまう。

「あの、先生」

マリアが助けを求めるように声をかけると、ザムエルが答える前に女性が近づいてきた。

腰を屈めて、顔をよく見せてと言うように白い手袋をはめた手をマリアの頬に添える。

「ああ、ヒルデに似ているわ……！」

そう言ったかと思うと、美しい瞳にみるみるうちに涙を浮かべたので、マリアはぎよつとした。

「ヨゼフィーネ。落ち着きなさい」

「だって、あなた。この子、あの子にとてもよく似ているんですもの！」

あの子——ヒルデ。その女の子に自分は似ているらしい。でも、いったい誰なのだろう。

「マリア。その方たちはリーデル伯爵夫妻です。お二人にはあなたと同じ八歳のお嬢さんがいるんですよ」

「わたしと、同じ……」

「ええ。ですが……少々事情があつて、行方を探しているところなんです」

ザムエルはそこまで口にして、自分が話してもいいか確かめるように夫妻の方をちらりと窺った。二人が頷くのを見ると、彼は言葉を選びながら事情を説明する。

三年前の出来事だ。

夫妻は一人娘であるヒルデと共に、美しい湖のある街を旅行していた。ホテルに到着すると長旅でヒルデが疲れて眠ってしまったので、夫妻は乳母に娘を任せて外出した。

昼寝から起きたヒルデは両親に置いて行かれたとも思ったのか、乳母の目を盗んでホテルの外へ出る。そして、そのまま行方不明になってしまった。

乳母と伯爵夫妻はもちろん、ホテルの関係者や街の警察も血眼になって探したが、見つからなかった。諦めきれない夫妻は王家にも嘆願して手を貸してもらったが、やはりヒルデの消息はつかめなかった。

楽しい家族旅行で娘を失うことになってしまい、夫妻は嘆き悲しんだ。特に母親であるヨゼフィーネの悲しみは深く、体調を崩して寝込むほどだった。夫や使用人たちの献身的な支えにより、どうか以前と同じ生活を送れるようになるまで回復したが、心は晴れないままであった。

そんな時だ。彼女が夫の勧めでメイドと共に気晴らしに街へ出かけ、おつかいを頼まれていたマリアを見かけたのは。

「あなたの髪を見た瞬間、ヒルデだと思ったわ。あの子と同じ、可愛らしい髪色をしていたんですもの」

マリアの髪色は淡いピンク色だ。この国では珍しいと言えば珍しい。

「でも、わたしは——」

「ええ、わかっているわ。あなたはヒルデではない。ヒルデであってほしいと思ったけれど……違うのよね」

ヨゼフィーネはマリアのことを調べて、孤児院出身であることを知った。物心つく前にマリアの両親が亡くなり、親戚が育てきれず知り合いが経営する孤児院に預けたことも。

「でも、そんなことは些細な問題だわ。私はあなたを見た時、運命を感じた。……マリア、あなたと一緒に暮らしたいの」

ヨゼフィーネの提案に、マリアは驚きのあまり言葉を失った。

「一緒に暮らしたい、つて……」

「きみを私たちの娘として迎えたいんだ」

妻の言葉を補うように伯爵が告げた。養子として引き取りたいということらしい。

「そんな、わたし……」

マリアは夫妻の事情を聞いてしまったがゆえに尻込みした。二人はマリアをヒルデの代わりではないと言っていたが、彼女と同じ髪色だからこそ自分を引き取ろうとしている。

それは結局、ヒルデとして生きていかなくはないといけないような気がしたのだ。自分にはとても荷が重い。

「院長先生……」

マリアは、今度こそはつきりとザムエルに助けを求めた。

しかし彼はマリアの纏るような目に気づかず、伯爵夫妻の方を見ている。

「お二人とも。まだマリアも混乱している様子ですから、今日はお帰りになってはいかがでしょうか」

ザムエルはマリアを助けるつもりでそう言うってくれたのだろう。実際に、マリアの心臓はまだ大きく音を立てていた。

「……そうだな。ヨゼフィーネ、また来よう」

「でも……いいえ、そうね」

ヨゼフィーネは諦めきれない様子でマリアを見つめていたが、マリアがどこか怯えた様子で黙り込んでいるのに気づき、やがて渋々と頷いた。

それでも最後にどうしても伝えておきたいと思ったのか、マリアの小さな手を取り、懇願するよう告げた。

「マリア。私たちは本当に、あなたと家族になりたいと思っているわ。そのことはどうか忘れないでね」

マリアは何も言えないまま、ザムエルに会釈して部屋を退出する二人を見つめた。ザムエルも彼らに付き添い、部屋を出て行く。

一人残されたマリアは、途方に暮れた気持ちでその場に佇んでいた。

（わたしと同じ髪色の子……養子にしたいって……あの人たちと、一緒に暮らす？）

言われたことを頭の中で繰り返して、状況を整理しようとするが上手くいかない。

ただ二人が話をしたただけなのに、短い時間の間でとてもたくさんのが起きた気がする。  
「急な話で驚いたでしょう？」

見送りから戻ってきたザムエルは、マリアの心中を察してか困ったように微笑んだ。

彼は笑うと目尻に皺しわができる。マリアはその表情を見るといつも安心できたのだが、今は妙な胸騒ぎがした。

「はい、とても。……あの、お二人はまだヒルデ様を探している、のでしょうか？」

見つからないとはいへ、実の娘だ。

夫人の様子からしても、きれいさっぱり忘れることはできない気がした。

「ええ、もちろん。王家は搜索を打ち切りましたが、お二人は諦めず、人をやって地道に聞き込みを続けているそうです。どこかで必ず生きていると信じているのでしょう。ですが、信じ続けることはとても辛いことです。夫人は恐らく、あなたと過ごすことで傷ついた心を癒やしたいのではないのでしょうか」

夫人のやつれた表情を思い出し、マリアは気の毒に思った。力になりたいとは思う。……でも、養子になるという提案はあまりにも急な話だ。

「先生、わたしはどうすればいいのでしょうか」

マリアは、ザムエルが「孤児院にいたいのならばずつといてくれて構わない」——そういったことを口にしてくれると心のどこかで期待していた。とにかく、今胸に渦巻く不安を取り除いてほしかった。しかし——

「そうですね……」

「先生？」

ザムエルは言葉の途中で窓際に寄り、外を眺めた。マリアも近寄って見下ろすと、伯爵夫妻がちょうど帰って行くところで、とても立派な馬車に乗り込んでいる。

その光景を見ただけでも、彼らがマリアとは無縁の世界を生きてきたことがわかる。

伯爵家の養子になるなど、やはり無理な話だ。

しかし、ザムエルが口にしたことはマリアの考えを否定するようなものだった。

「……マリア。お二人の娘になるということは、あなたの長い人生においても幸運なことかもしれないですね」

「どうして、ですか……？」

何となくわかるものの、マリアは認めたくなくて、あえてわからない振りをして尋ねた。

ザムエルが振り返り、膝をついてマリアと同じ視線になる。

「伯爵家で生活すれば、衣食住に困ることはありません。教養や礼儀作法も身につけることができますでしょう。そういったことは、誰もが学べるものではありません。特別な人間にしか許されないことなのです」

自分はまだ子どもで外の世界も少ししか知らないが、ザムエルの言っていることは恐らく正しい気がした。伯爵夫妻の身なりや物腰には品があり、今まで出会ってきた人間と違うから。

「先生の言う通りだと思います。だけど、わたしは……」

マリアはぎゅっと手を握りしめた。

(わたしは、ここにいたい……)

ザムエルの言う通り、伯爵家の養子になればお腹いっぱい食べることができ、何着も新しい服に袖を通して、たくさんの本を読めるようになり、文字もすらすら書くことができるようになるかもしれない。

「夫妻はあなたのことをとても気に入っているご様子でした。特にヨゼフィーネ様は……あなたを本当の娘として育ててくださるでしょう」

「……」

「マリアは、二人が怖い方に見えましたか？」

黙って首を横に振る。

伯爵夫妻は優しそうな人たちだった。

こんな自分に、家族になりたい、と言ってくれるくらいだ。愛情を持って接してくれるだろう。それでも、マリアは孤児院で暮らし続けたかった。物心ついた時にはすでにここが自分の家で、居場所だった。確かに大変なこともあるが、もう慣れた生活なので十分に安心感を得られている。今さら余所よその家など行きたくなかった。平穏な生活に変化が訪れるのが嫌だった。

(わたしを捨てないで)

血の繋がった親戚も、結局自分を捨てたのだ。

仕方がないことだと思っても、その事実は幼いマリアの心を傷つけた。

そして今も心のどこかで怯えている。また同じ思いを味わうのではないかと。

「マリア」

ザムエルなら、そうしたマリアの気持ちわかってくれると思った。だって彼は幼いマリアが泣いていた時、ずっとそばで寄り添ってくれた人だったから。

彼は院長としては年が若く、それゆえ兄のように接しやすかった。あまり人と関わるのが得意ではないマリアにとって、頼りになる特別な人だ。

ザムエルも同じように思ってくれていると、子どもながら感じていた。

だから手放すはずはない。そう信じていたが――

「あなたが不安になるのは当然です。でも、いつかはここを出て、一人で生きていかなければなりません。少し早いかもしれませんが、勇気を出して伯爵家へ行ってみませんか？」

マリアは頭を思いきり殴られたような強いショックを受けた。

呆然とザムエルの凪ないだ瞳を見つめていると、自然と口から言葉が出る。

「先生は、わたしが邪魔なのですか？」

ザムエルが大きく目を見開く。

「そんなことはありません！ 私も、あなたとずっとここで暮らしていければと思いますよ」  
なら、とマリアはザムエルに詰め寄り、彼の袖を掴んだ。

「ここにいさせてください。わたし、もっと良い子になりますから。お手伝いもたくさんして、他の子たちの面倒も見ます。先生の役に立ちます。だから……」

追い出さないで。見捨てないで。

青い目に涙を浮かべて叫んだマリアをザムエルは痛ましそうに見つめたが、「わかりました」とは言ってくれなかった。

「マリア。私も、できればあなたの願いを叶えたい。ですが、世の中にはどうしようもないことがあるのです。……こんなこと、まだ子どものあなたに言うべきではないのでしょうか……孤児院の経営は、本当はぎりぎりなのです。それで……もし、あなたが伯爵家の養子になることを引き受けてくれれば、お二人は援助するとおっしゃってくれて……すみません、これも子どもたちのためなのです」

マリアから目を逸らし、心苦しそうにザムエルは語る。

幼い子どもたちがいつもお腹を空かせて、中には泣いている子もいることをマリアは知っていた。当然だ。そんな彼らを宥なだめていたのは自分なのだから。

そして、わたしにも何かできることがあればいいのに、と思っていたのも。

「……先生、わたし、伯爵家の養子になります」

「本当ですか」

歓喜で驚いた声を上げるザムエルに、マリアは俯うつむいたまま小さく頷いた。



翌日、ザムエルが伯爵家に返事をする、その数日後には伯爵家から迎えの馬車が来た。

マリアにとつてはあまりにも早い展開で、先生や他の子どもたちに別れを告げる時どこか上空になつてしまった。

「マリア。リーデル卿たちの言うことをよく聞くんですよ。……どうかお元気で。あなたの幸せを願っています」

伯爵家に行った後も顔を見せていい、何も一生の別れではないとザムエルは慰めてくれた。でも、別れの言葉を聞くと、マリアにはこれが二度と会えないような永遠の別れに思えて、胸が押しつぶされそうになる。それを堪えて、ゆっくりと馬車に乗った。

貴族の屋敷が建ち並ぶ通りに馬車が到着すると、御者に扉を開けてもらい、マリアは外に出た。

見上げるほど立派な屋敷が目に入っても、感嘆の声を漏らすことはない。怯えた表情でそれを見上げて、息を殺すように立ち尽くす。

「マリア様、どうぞ中へ。旦那様と奥様がお待ちでございます」

敬称で名前を呼ばれて案内されるのも初めてのこと、マリアはおどおどしながら御者の後についていく。

「まあまあ、マリア。よく来てくれたわね。嬉しいわ。本当にありがとう」

大きな玄関には、すでにヨゼフィーネや大勢の使用人たちが待機していた。

彼女はまるで本当の家族のようにマリアを抱きしめてくる。細い見た目からは想像できない強い力が、もう決して離さないという意思を感じさせた。

「こちら、ヨゼフィーネ。マリアが固まっているだろう」

そばにいた伯爵がとりなすと、ヨゼフィーネはようやくマリアを解放して謝った。

「ごめんなさい。私っただらつい浮かれてしまつて。ごめんなさいね、マリア」

「いいえ。あの、今日からお世話になります」

マリアが胸の前で手を握つて頭を下げると、ヨゼフィーネは「まあ」と驚いた。

「そんな他人行儀な話し方はよしてちょうだい。あなたは私たちの娘になるのだから。……どうかお母様と呼んで」

「でも……」

「マリア。私のことも遠慮せずにお父様と呼んでくれ」

いきなりそう言われても、マリアは困惑するばかりだ。

しかしザムエルには、夫妻の言うことをよく聞き、良い子であるように言いつけられていた。

そして期待に満ちた表情で自分を見つめる夫妻を裏切るような真似は、マリアにはできなかった。

「お母様、お父様……これから、よろしくお願いします」

「ええ、マリア。今日からあなたは私たちの子よ」

そう言つて、ヨゼフィーネはまたマリアを抱きしめた。嗅ぎ慣れない香水の匂いのせいか、胸がときどきする。

「さ、二人とも。挨拶はそこまでにして、食堂で昼食でも食べようじゃないか」

「そうですね、あなた。マリア、あなたのためにたくさん美味いものを用意したの。好き嫌い

がまだわからなかったから、嫌いなものがあつたら残していいわ。好きなものを教えて？ 昼食を終えたら、この屋敷を案内するわね。今日からここがあなたの新しい家ですもの。あなたの部屋もあるのよ」

ヨゼフィーネはマリアが相槌を打つ暇もなく捲し立てる。まるで欲しいものを与えられて興奮する子どものようだ。

はしゃいだ姿をマリアは一步引いた距離で見つめ、よほど自分という娘が欲しかったのだなと思つた。あまりにも急な出来事であつたため、マリアは養子になるという事実をまだ受け入れられていない。

(……いいえ、だめよ。二人はわたしを歓迎してくれている)

ザムエルとも約束したのだ。

だから立派な娘——伯爵夫妻の愛するヒルデのようにならなければならないと思つた。

最初の一週間は、新しい生活に慣れてほしいということで比較的自由に過ごすことができた。

と言つても、夫人も伯爵もマリアにたくさん話しかけてきたし、広い屋敷と庭を案内したり、美味いお菓子をたくさん出させて甘やかそうとしたりしたので、マリアは彼らの機嫌を損ねないよう気を遣つた。

一カ月経つた頃。そろそろ屋敷での暮らしにも慣れたらうと、マリアは女性の家庭教師を付けられた。

算術や読み書きだけでなくこの国の歴史や自国語以外の言語、礼儀作法を学ぶことになったが、夫人たちは辛かったら無理をしなくていいと言ってくれた。

「ヒルデもね、よく嫌だと言って、私たちのもとに逃げてきていたの。だから、あなたもそうしていいのよ」

「子どもは遊ぶのが一番の仕事だからね」

でも、貴族出身の家庭教師はマリアの教養のなさや平民の振る舞いをよく思っておらず、マリアが小さなミスを犯す度に眉根を寄せて小言を述べた。

「奥様と旦那様の娘になるのでしたら、今のままではいけませんよ」

「はい……」

家庭教師だけではない。

伯爵家に仕える使用人たちもマリアのことを痩せっぽちの少女としか見ていないのが、何となく伝わってきた。

「奥様と旦那様はあの子をヒルデお嬢様の代わりとして育てるおつもりなんでしょうけれど、私はそう簡単には受け入れられないわ」

「あたしもよ。似ているって言ったって髪の色だけでしょ？ お嬢様はもつと濃いピンク色の髪だったわ」

「そうよね。雰囲気も違うし、お嬢様はもつと明るい方だった」

「親もいなかったそうだし、孤児院で育ったのなら無理もないかもしれないけど」

使用人たちのたまり場である厨房でそんなふうメイドたちが話していたのを、マリアは陰で聞いてしまった。傷つきはしたが、ヒルデとマリアは違うと主張する彼女たちの言葉にどこか安堵もした。

（お父様とお母様も、いつか気づくかしら）

マリアがやはり実の娘とは違うことに。

その時、自分は孤児院に帰れるだろうか。

でも、そうしたらザムエルとの約束を破ることになる。伯爵夫妻が自分を引き取る代わりに支援してくれたお金が途切れてしまうのだ。そうなれば、子どもたちはお腹いっぱいご飯を食べられなくなる。

それに、帰ったところでマリアはいずれ働き口を見つけて出て行かなければならない。

（もし、お父様たちの気が変わったら……ここで使用人として雇ってもらえないかな）

せめてそれくらい温情はかけてもらえる気がした。

そう考えると、使用人たちとも今のうちに仲良くなっておいた方がいいだろう。

（頑張ろう）

彼らに認めてもらうには努力するしかない。

元来真面目な性格であるマリアは、彼らに嫌われないよう、伯爵夫妻に迷惑をかけないよう、必死で教えられたことを覚えようとした。

（明日はテストするって言っていたから、もう一度復習しておこう）

与えられた自室の机に向かつて、マリアは眠い目を擦って教科書を見つめた。

こうしていると、孤児院で暮らしていた時のことが思い出される。

夜、眠れない子どもたちに本を読んで寝かしつけていた頃も眠気と戦っていたが、今とは違う。こんなふうに自分の部屋を宛てがわれて勉強するなんて思いもしなかった。

(本当なら、この部屋はヒルデ様のものになるはずだったのよね……)

彼女のことを考えると、マリアは重たい気持ちになる。そして余計に頑張らなくてはと思い、再び教科書の暗記に集中するのだった。

教えられたことを覚えようと毎日必死に食らいついたおかげか、マリアは少しずつ家庭教師に叱られることが減っていった。使用人たちも余所余所しさはあるものの、マリアに慣れようとしている様子が窺えた。

「マリア。お勉強はそれくらいにして、遊びに行きましょう」

「はい、お母様」

ヨゼフィーネは頻繁にマリアと外出しては劇を観せたり、美味しいものを食べさせたりした。そしてマリアに新しくドレスを仕立てて、それに合う靴や帽子、アクセサリーなどもたくさん購入するのだ。すでにクローゼットの中は溢れんばかりのドレスや小物で埋まっているというのに。

「本当に可愛いわ」

でも、ヨゼフィーネのはしゃいでいる姿を見ると、必要ありませんとは言えなかった。

口にすれば、きっと彼女は実の娘に拒絶されたと思って傷つくだろうから。

さらにヨゼフィーネは月に一度、マリアが暮らしていた孤児院を訪問した。伯爵家の養女になったマリアが元気にしている様子を見せるためであり、使用人に作らせた菓子を配るためでもあった。「マリア。久しぶりですね」

「お久しぶりです。院長先生」

マリアは微笑んでザムエルと挨拶を交わす。

伯爵家の寄付によって施設内は綺麗になり、子どもたちの笑顔も増えたように見える。

「リーデル家での生活はどうですか？」

院長室でザムエルと向き合って長椅子に座り、問いかけられる。マリアの隣にはヨゼフィーネもいた。

「お父様もお母様もとても優しく、毎日楽しいです」

マリアはあえて声を高めにし、笑顔を意識して話す。

「それはよかった。……それにしても、そうして並んでいると、本当の親子のように見えますね」

「まあ、本当ですか？ 先生」

ザムエルの言葉に、ヨゼフィーネが嬉しそうに頬に手を当てる。

以前も同じようなことを口にして、彼はヨゼフィーネを喜ばせていた。

「ふふ。私とあなた、似ているんですって。不思議ねえ」

孤児院からの帰り、ヨゼフィーネはとても機嫌が良かった。

マリアもヨゼフィーネが微笑んでいると安堵する。

「ね、マリア。背中まで髪を伸ばしましょう。お母様と一緒に。女の子は髪が長い方が可愛いもの。そうした方がいいわ」

「……はい。わたしも、お母様と同じ綺麗な髪になりたいです」

それからもマリアは逆らわず、ヨゼフィーネの望む娘を演じた。いや、演じるほどの演技力はなかったのだ、ただ笑みを浮かべて従順に従った。そうすれば、みんなが幸せになると思っている。

伯爵家に引き取られてから二年の月日が経った。

十歳になったマリアはもう使用人や街ですれ違う人々から、孤児院育ちの平民だとは思われないほどの立ち振る舞いができるようになった。

ヨゼフィーネもそんなマリアが誇らしいのか、あるいは余所へ連れて行っても恥をかかないと思っただのか、付き合ひのある友人に紹介し始めた。

「マリアよ。とてもいい子なの」

ヨゼフィーネの友人の娘とも一緒に遊んでいるうちに親しくなり、マリアは少し肩の力を抜くことができた。

「マリアって、お母様にあまり似ていないのね」

だが時々、子どもらしく思ったことをそのまま口にされてひやりとする瞬間があった。そういう時マリアは、自分を戒めるようにもつと努力しなければと言いかせるのだ。

友人と呼べる関係を数人作ると、両親は次の段階に進むように婚約者を紹介した。

エルヴィン・フレーベル。子爵家の嫡男で、歳もマリアと同じだ。

「初めまして」

黒髪でそばかすのあるその少年は、優しそうに見えた。マリアを気遣うように微笑んでいる。

婚約は親同士で決めたことだが、互いにまだ子どもだったので、まずは友人として仲を深めていけばいいと二人きりで遊ぶよう勧められた。

「きみみたいな可愛い子が僕の婚約者になってくれて、とっても嬉しいよ」

中庭を歩いている時、エルヴィンがはにかみながら告白した。

孤児院を出てから同世代の男の子と接していなかったマリアは恥ずかしい気持ちになって、頬を赤く染めた。

「ありがとうございます」

「敬語はいいよ。同い年だし、僕の方が家柄は下だし」

まだ十歳なのに、エルヴィンは貴族の爵位を重視しているようだ。そんなところがやはり自分とは生まれが違うのだなと思いつつながら、マリアは頷いた。

「わかったわ。これからよろしくね」

「ああ。エルヴィンって気軽に呼んでいいから。僕も、マリアって呼んでいい？」

「ええ、もちろん」

エルヴィンはまた笑った。明るい少年だと思った。

実際その後の付き合いでも、エルヴィンはマリアに優しくしてくれて。時々、強引に感じる時も

あつたが、それは MARIA があまり自己主張しないせいだろう。

「MARIA はさ、もつと我儘わがままになつてもいいと思うよ」

付き合いが長くなるにつれて、そう言われることが増えた。

MARIA ももつと自分の気持ちを表に出した方がいいのだろうと思つたが、お喋りしやべりははしたくないという家庭教師の教えがどうしても頭をよぎつてしまふ。

自分の意思を伝えて相手に受け入れられなかつたら……と臆病な気持ちになり、結局何も言わない方がいいと口を噤つぶんでしまふのだ。

そして何より、自分はヒルデの代わりで、本当は平民の孤児院出身だという意識が消えなかつた。

「MARIA がつてさ、本当は孤児院出身なの？」

ある日、エルヴィンの何気ない一言に、MARIA は頭の中が真っ白になつた。

言葉を失う MARIA を、エルヴィンがじつと見つめる。彼女は内心激しく動揺しながらも、何とか平静を装つた。

「ええ、そうなの。両親が亡くなつて、孤児院に預けられて……でも、今のお母様とお父様が引き取つてくれて、本当の娘のように育ててくれたわ」

自然と早口になつて、自分でもどこか言い訳しているように聞こえる。

「ふうん。そうなんだ」

エルヴィンの返事に MARIA は不安になつた。今の答え方はまずかつただろうか。貴族の子ではないとわかつてがっかりしただろうか。婚約を解消したくなつただろうか。

「リーデル夫妻つて、優しい人たちなんだね」

「……ええ、とても」

エルヴィンの笑顔に安堵するも、MARIA の不安は拭ぬききれなかつた。

幸いにも、エルヴィンの態度はその後にも変わらなかつた。疑つてしまつたことが申し訳なくて、でも、心のどこかで安心してた。

それから、MARIA は週に二、三度エルヴィンとの交流を続けて仲を深めた。

年齢を重ねるにつれて異性と接する気まずさや緊張を覚えるかと思つたが、エルヴィンの気さくな性格のおかげか、全くそんなことはなかつた。

十六歳という年頃になつても未だ友人のように感じている。MARIA は伯爵家での生活を完璧にこなさなければならぬと常にいつもどこか気を張つていたので、これくらいの関係がちやうどよかつたのだと思う。

(結婚したら、夫婦らしくなるのかしら)

結婚は家同士の結び付きを強めるためのものだと教えられた。高貴な人間は平民よりも裕福な生活を送ることができるが、その代わり義務があると。

男性は領民や領地を守ること、女性はそんな夫を支えて跡継ぎを産むこと。

(家族を、作ること……)

心の中でそう繰り返して、MARIA は自分の過去と将来について考えてみる。

両親は幼い頃に亡くなり、親戚にも存在を面倒がられて孤児院に預けられた。孤児院での生活に

慣れてからは伯爵家に引き取られて今に至る。

(そんなわたしにできるのかな)

正直不安だ。でも、血の繋がりがある家族が欲しいという気持ちはあった。

子ができるまでは夫が唯一の家族だ。伯爵夫妻のような仲睦まじい夫婦に、できればなりたいたいと思っていた。

「ねえ、エルヴィン。わたし、まだまだ至らないところがあるかもしれないけれど、あなたの隣に立つても恥ずかしくないような妻になるわ」

エルヴィンと会った際、いつになく真剣な表情で伝えたマリアが珍しかったのか、エルヴィンは目を真ん丸にした。

そして次の瞬間、噴き出すように笑った。

「急に深刻な顔をして何を言い出すかと思えば……別れ話かと思っちゃった。びっくりさせないよ」

「ご、ごめん！ でも、きちんと伝えておきたいと思つて」

「ありがとう。でも、そんなに肩肘張らなくても、マリアはもう十分僕の妻に相応しいと思うよ」

「そう、かしら」

そうだよ、とエルヴィンはにこりと笑う。

「それに少しくらいだらしないうところがあつても、僕は気にしないよ。マリアは僕にそんなところがあつたら幻滅する？ 嫌いになる？」

「いいえ、そんなことないわ」

「よかった。なら、マリアもそうしてよ」

エルヴィンの言葉に、マリアは不安を感じていた心が慰められた。

そしてもう少し、彼のことを信じてみようと思つた。

(今までわたしの方から壁を作っていたけれど……夫婦になるのなら、もっと自分の心を見せないためよね)

それはエルヴィンだけではなく、伯爵夫妻や使用人たちにも言えることだ。

引き取られてから、もうそろそろ九年。十七歳になったマリアは社交界デビューを無事に迎えて、大人の仲間入りもした。

エルヴィンと結婚すれば、これからもっと本格的に外へ出て行く機会が増えるだろう。

人が大勢いるところに出かければ、心ない言葉を浴びせられたり陰口を叩かれたりと、嫌な思いをすることもある。そういう時、家族や婚約者の存在はきつと心強い味方になるはずだ。

だから勇気を出して、マリアは歩み寄ってみようと決めた。

遅すぎずの決断であるが、どうしても遠慮して一歩引いてしまっていた心を強くしたい。

これからは――

「お、奥様！ 旦那様！ 見つかったそうです！ ヒルデお嬢様が！」

ある日の夕食後。家族団欒を楽しんでいたマリアたちのもとに、いつもは冷静な家令が取り乱した様子で報告しにきた。

伯爵夫妻の本当の娘であるヒルデが見つかった。

彼女は隣国の農村に住む老夫妻のもとで育てられていたらしい。

発見者は、普段マリアの住む国や隣国で商いあきまをしている商人だ。彼が仕事で今まで行つたことのない村へ足を運んだ時に、見つけたという。

リーデル伯爵夫妻の娘が行方不明になった事件を記憶していた商人は、その娘の特徴ある髪色と農民の娘にしてはどこか気品ある顔立ちに、ひよっとしたら……と思つたらしい。

だがまだ確証を得るまでには至らなかつたので、とりあえず商人は伯爵家に連絡して判断を仰ぐことにしたのだという。

知らせを受けた伯爵夫妻は、最初半信半疑の様子だつた。これまでも見つかつたと言つて、髪を染めただけの全く似ていない娘を連れてくるお礼目当ての人間が大勢いたからだ。

またヒルデがいなくなつて、すでに十年以上の月日が経つていた。見つかつてほしいと思いがながら心のどこかでもう……という諦めの境地に入りかけていたのだ。

しかし、万が一という場合もある。

それに、やはり見つかつたと聞けば、消えかけていた希望に火が灯るものだ。

夫妻は人をやつてその娘を伯爵家へ連れて来させた。そして――

「ヒルデと言います。えつと……あなたたちが、私のお父さんとお母さん、ですか？」

部屋の中がしんと静まり返つた。

「なんて、ことだ……」

最初に声を上げたのは伯爵だつた。

他の者はみな言葉を失つて、少女の顔を凝視している。

マリアもまた、ヒルデを目にした瞬間から呆然としていた。

(お母様とお父様に、似ている)

その顔は、ヨゼフィーネの若い頃にそっくりだつた。

その目は、伯爵と同じエメラルドのような美しい緑色だつた。

髪色も、マリアと同じピンク色だつた。いや、違う。マリアよりも彼女の方が濃いピンク色で、

ふわふわ波打つそれが輝いて見えた。顔立ちも愛らしく、天使のように可憐な少女だ。

誰がどう見ても、彼女は二人の娘。本物のヒルデだつた。

しかし長年探し続けてきた娘があまりにも突然現れたものだから、まだ信じられないのだろう。

伯爵はゆつくりとヒルデに問いかけた。

「私たちのことを、覚えていないのか？」

「ええ……ごめんなさい」

当時ヒルデは五歳で、両親についてある程度記憶しているのではないかと思つたが、離れ離れになつたショックで記憶を失つてしまつたのだろうか。

「では当時のことを、何か覚えていないか？」

「あまりよく覚えていないんですけど……でも、建物がたくさんある場所や、誰かと一緒だったことは覚えていますが」

「他には何か？」

伯爵が急ぎ立てるように言葉を重ねる。

ヨゼフィーネも継るようにヒルデを見つめていた。

「他は……ああ、そういえば、綺麗な湖も……私の暮らしていた場所にはない風景でした。ボートにも乗った記憶があつて、ずっと不思議だったんですけど……」

ヒルデの言葉に、伯爵たちが息を呑む。それは恐らく、最後の家族旅行で体験した記憶なのだろう。

「あとは……誰かに手を引かれて……そう、疲れてしまった私を、誰かが抱き上げてくれたんです。とても安心する温もりで……私に優しく笑いかけてくれる人がいました。もしかして、あれがお父さんとお母さんだったのでしょうか？」

「ヒルデ……」

伯爵が娘の名前をぼつりと呟いて、一步前へ足を踏み出した。

間違いない。この子は私たちの娘だ。本物のヒルデだ。

そんな伯爵の心の叫びがマリアにははっきりと聴こえた。

「ああ、ああ……！」

口元を両手で覆い、ずっと一言も発せなかったヨゼフィーネが嗚咽を漏らすような声を上げた。先に駆け寄った伯爵に続いて、少女に近寄る。そして恐る恐る彼女の柔らかな頬を両手で挟み、食い入るように見つめた。ヒルデは不思議そうに首を傾げている。

「お母さん？」

そのたつた一言で、ヨゼフィーネの目から大粒の涙が溢れた。

「ヒルデ！」

ヨゼフィーネは娘の名前を叫ぶように呼んで、強く抱きしめた。力いっぱい抱擁には、娘が生きていたこと、ここに帰ってきたこと、また会えたこと……たくさんの喜びが込められているように感じる。

「ごめ……ごめんなさいっ、あの時、あなたを置き去りにしてしまって、本当にごめんなさいっ」夫人があの日ヒルデを失ってからずっと後悔していたのは、マリアにもわかっていた。

我が子を置いて外出しなければよかった。そうすれば娘を失うことなく、ずっと一緒に暮らせたのに……、と。

「お母さん、泣かないで。私は大丈夫よ」

ヒルデは天使のように優しい表情をして自身の母親を抱きしめ、慰めと許しの言葉をかけた。

それですます夫人は号泣してしまい、伯爵も泣いて妻と子どもを抱きしめる。親子の感動の再会に、使用人たちも鼻をすすっていた。

マリアは、それらすべてを広い部屋の隅で見ている。

よかった、と思わなくてはならない。

だって、ヨゼフィーネたちはずっとヒルデのことを心配していたのだから。

彼らが娘の無事を神に祈っていることも、一緒に暮らしていたマリアは知っていた。

だから、ヒルデが無事に戻ってきて、本当によかったと思うべきだ。なのに――

(わたし、これからどうなるんだろう)

そんなことを思ってしまった自分がたまらなく嫌だった。最低だと思った。

その一方で、本当の娘が帰ってきたことで身代わりの役目は終わったと、心の奥底にいるもう一人の自分が冷酷に告げる。

捨てられるのではないかと怯える自分がいた。

引き取られた時も、それから度々孤児院に帰りたいたと願っていたくせに、マリアは自分でも気づかぬうちに伯爵家を己の居場所だと思っていたようだ。

ヒルデが帰ってきて、そのことに気づかされた。

「ヒルデ。こちらはマリアよ」

ヨゼフィーネたちはマリアを孤児院に送り返すことはしなかった。外聞もあるし、今まで育ててきた情があるのだろう。

でも、ヒルデに事情を説明する時の顔はどこか気まずそうだった。

「孤児院で生活していたの。あなたと同じ歳で、ご両親は幼い頃に亡くなられて……可哀想だから、

家で引き取ったのよ」

寄付をしている孤児院の院長から頼まれて、引き取るか悩んだものの、マリアに会って決めた。

そんなふうには、ヒルデの顔色を窺いながらヨゼフィーネたちは話した。その間、マリアの方は一切見ない。

黙って耳を傾けているヒルデを見ているうちに、マリアも緊張してきた。

実際はヒルデの代わりにマリアを引き取ったのだが、本人からすると、あまり気分のいい話ではないだろう。行方不明だった自分を見捨てたように感じるかもしれない。

自分が与えられるはずだった親の愛情を、全く関係のない余所の子に奪われたのだとも。

(恨まれてもおかしくない)

だからいきなり両手をぎゅっと握りしめられて、マリアはびくつと全身を震わせた。

次いで自分を見つめるキラキラと輝く瞳に目を奪われる。

この子はなんて明るい目をしているのだろう。

(どうしてそんな顔、できるの)

「じゃあ、私の姉か妹ってこと？ わあ、嬉しい！」

その言葉に、マリアだけでなくヨゼフィーネたちも呆気に取られたようだ。だが、すぐにヒルデを愛おしむように見つめて笑みを浮かべた。

「ええ、そうよ。あなたたちは姉妹なの」

「素敵！ ね、マリア。私が姉でもいい？ あつ、でもやっぱり、お姉様って呼びたいから、私が

妹でもいいかな？ 誕生日はどちらが先なのかしら？」

「わ、わたしはどちらでも……」

「そう？ じゃあ、いつもはお姉様って呼んで、時々マリアって呼ぶね！」

屈託なく笑って宣言するヒルデに、まあ、と夫人たちが驚いて、自然と笑いが起きた。敵わないと思った。なぜかとても胸が苦しくなった。

(笑わなく、ちゃ)

そしてヒルデが言ったように、これからは彼女の姉として振る舞わなければならない。にこにこ微笑むヒルデの姿を見つめながら、マリアはそう心に刻んだ。

「お姉様！ 一緒に外で遊びましょう！」

「でも、ヒルデ。あなた、まだ課題が終わっていないでしょう？」

「そんなの後でいいわ！ 先生も許してくれるはずよ」

そう言ってヒルデはやや強引にマリアの手を引っ張り、廊下を走り出す。

早いもので、ヒルデが伯爵家に戻ってきてから一年が過ぎた。

「ヒルデ！ 淑女が廊下を走ってはいけませんよ！」

「お母様、見逃して！ 外から戻ったら、またレディに戻るから！」

長い空白の期間があったというのに、ヒルデはあつという間に伯爵家に馴染んでいった。考えてみれば当然だ。もともとこの家は彼女の居場所だったのだから。

「もう、お嬢様ったら、また服を脱ぎ散らかして！」

「ごめんなさい！ 片付けておいて」

まったく、と怒りながらも、メイドの顔は優しくなった。ようやく帰ってきたお転婆な主の世話が楽しくてたまらないのだろう。

マリアは掃除や洗濯の大変さを知っているので、決してメイドたちの手がかかるようなことはしなかった。そんなこと、できなかった。

「ねえ、どうしてお姉様はお母様たちに余所余所しいの？」

二人きりになってヒルデにそう訊かれた時、マリアは言葉に詰まった。

「そんなつもりは、ないけれど……そう見えるかしら？」

「見えるわよ。いつも一線を引いているというか……やっぱり、実の親ではないから？」

あつからかと答えを言い当てるヒルデに、マリアは曖昧に微笑んで誤魔化した。

たとえそうだとしても、口にするのはヨゼフィーネたちに失礼だと思ったからだ。

「私もおばあさんとおじいさん……向こうにいた時に育ててもらった人たちとは血が繋がっていないか？」

「そうなの？ 怒られたり嫌われたりするの、怖くなかった？」

ちっとも、と笑うヒルデの笑顔が眩しく感じる。

「確かに我儘を言った時、怒られたり困った顔をされたりすることはあったけれど、二人とも私のことが大好きだってわかっているから平気。それにすぐに忘れちゃうもの」

だからお姉様もそうしてみたら？　と言われても、マリアには到底できないことだ。  
(きつとヒルデは、みんなから愛される特別な子なんだわ)

だから行方不明になっても、優しい人に助けてもらって、愛情を注いでもらえた。  
自分だったら絶対にそうはならない。

(すごいな、ヒルデは……)

屋敷にいなかった十年以上の月日を、ヒルデは急速な勢いで埋めていき、まるで悲しい過去などなかったかのように明るく過ごしている。

「お母様！　演劇のチケットをもらったって聞いたわ。私も観に行きたい！」

「でも、一枚足りないのよ」

ヨゼフィーネがどうしようと言うようにマリアを見た。

「お母様。わたしは留守番していますから、ヒルデと一緒に出かけてください」

「まあ、そんな、悪いわ」

困り顔のヨゼフィーネにマリアはっこり笑い、気にしないでいいと伝える。

「お姉様もいつて言っているんだから、お母様、行きましょよよ！」

「そうね……ごめんなさい、マリア」

そう言って二人は仲良く出かけて行った。

マリアは本当に気にしていなかった。だって本来なら、ヨゼフィーネと出かけるのはヒルデだったのだから。素晴らしい観劇に可愛らしいドレス、美味しいデザートなど、幼い頃マリアに与えら

れたものはすべてヒルデのものだ。

(彼女は強くて、優しい)

私のものを奪ったくせに、と責められることをマリアは心のどこかで覚悟していたけれど、彼女は一切口にしなかった。そんな想像をした己を恥じ、よりいつそう罪悪感が増していく。

もっとヒルデに優しくして、何もかもを譲らなくてはいけない。

次第にマリアはそう思うようになった。

マリアのそうした気持ちは他の人間の態度にも変化をもたらした。

最初はマリアを気にしていたヨゼフィーネたちも、当たり前のように実の娘であるヒルデを優先し始め、マリアが伯爵家に来た頃のように敬語で話すのを寂しいと零すこともなくなった。

「お姉様。私、もっと明るい部屋がいいわ。代わってくれないかしら？」

「そうね。マリア、あなたには別の部屋を用意するから、ヒルデに譲ってくれる？」

「……はい、わかりました」

いつそ今からでも使用人として雇ってもらえないだろうか。

すでに社交界デビューしてしまったから難しいだろうか。

だけど、伯爵も夫人も、本当の娘のように思っているとみんなに話してしまったので、今さら態度を変えることなどできないだろう。

それにまだ十歳ならともかく、今の年齢で貴族令嬢から使用人になったら、働いている使用人た

ちも困るに決まっている。

「ヒルデお嬢様が戻ってきて本当によかったわ」

「本当ね。明るくて、少しお転婆だけれど放っておけない方よね」

「私は以前のヒルデ様を知らなかったから、勝手にマリアお嬢様みたいな方だと思っていただけ、全然違うのね」

マリアはメイドたちの世間話をうっかり耳にしてしまう度、胸がどきどきした。

扱いくいと思われていたらどうしよう。自分よりヒルデの世話係になりたいと言われたら。

もう伯爵家に自分が必要ないと言われたら。

(その時、わたしはどこに帰ればいいのか……)

孤児院に戻っても、院長であるザムエルは受け入れてくれるだろうか。

マリアは今でも月に一度、孤児院を訪問していた。もうヨゼフィーネが付き添うことはなかったけれど、使用人と共に向かい、時々自分で作った菓子を子どもたちに配っている。

ヒルデが伯爵家に馴染むようになるにつれて、その頻度は自ずと増えていった。

「マリアは本当に優しい子ですね」

ザムエルはそんなマリアの行動も、子どもたちのためだと思っっている。

「そんなことないです。わたしはただ……」

逃げてきているだけだ、とは言えず、マリアは口を噤んだ。

その様子を、ザムエルは謙遜けんそんしているだけだと思っただようだ。優しい表情でマリアに伝える。

「あなたのおかげで、この孤児院もずいぶんとよくなりました。私や他の職員、子どもたちも含めて、あなたには感謝していますよ」

「……他に何かできることがありますわ、わたし、手伝いますわ」

どこか思いつめた表情で言ったマリアに、ザムエルは少し驚いた表情を見せたが、困ったような顔で返事をする。

「ありがとうございます。その気持ちだけで十分です。これ以上こちらに足を運んでは、リーダー伯爵たちも心配なさるでしょう。あなたももう十八歳ですし、将来に向けて考えなくてはいけない時期なのですから」

無理をして来る必要はないと言われて、マリアは俯いた。

ザムエルの言う通りだ。今さら孤児院に戻りたいなどとは言えないし、許されない。

孤児院の子たちも、この年になると職を見つけて独り立ちする時期だ。

いつそ結婚して伯爵家を早く出た方がいいのかもしれない。そうだ。きつとヨゼフィーネたちもそう思っている。

自分にはエルヴィンという婚約者がいる。彼なら……

「——だめよ。あなたは、お姉様の婚約者ですもの」

いつものように伯爵家でお茶会を開いた日。

少し席を外すと言って部屋を出たエルヴィンを探したのが間違いだった。

「でも、ヒルデ。僕はきみが好きなんだ」

伯爵家の中庭の木陰で、エルヴィンがヒルデに告白していた。

彼は今までマリアが見たことのない真剣な表情をしていて、その眼差しは熱を帯びている。エルヴィンとは今でも婚約者の交流を深めるために週に一度、伯爵家でお茶をしていた。

いつもはヒルデもいるのだが、今日は体調を理由に参加していなかった。それをエルヴィンは心配して探したのだろう。

(エルヴィン……)

婚約者が自分ではなくヒルデに心惹かれていたことには、もうずっと前から気づいていた。

「マリアには悪いと思っている。でも、自分の気持ちにもう嘘をつけないんだ」

エルヴィンが初めてヒルデに会った時から、二人だけのお茶会にいつしかヒルデも加わるようになった頃から、マリアはこうなることを心のどこかで予感していた。

だから今二人が互いの想いを確かめ合う場面を目にしても、やっぱり……という気持ちで、それほどショックではなかった。すでに覚悟していたから。

もしヒルデが行方不明にならないければ、エルヴィンの婚約者はヒルデになっていた。最初から二人は惹かれ合う運命だったのだ。

(代わってあげたい)

ヒルデには好きな人と幸せになってほしい。エルヴィンに対しても、生い立ちのことですつと引け目を感じていた。自分が身を引くことで二人が幸せになるのなら、マリアは自ら婚約解消を願って出で、伯爵夫妻を説得しただろう。でも――

「だめよ。たとえあなたがお姉様の婚約者でなかったとしても……あなたとは一緒になれない」

「どうして？ 僕のことを嫌い？」

「違うわ。だって私……カリウス辺境伯様に嫁がなくてはならないもの」

ヒルデは、エーレンベルク国の北東部にある国境地帯を治めるジークハルト・カリウスに嫁ぐことが決まっていた。ゆえにマリアがエルヴィンと婚約を解消しても、彼とは一緒になれないのだ。

このことはまだ公おおやけに発表されていないため、ヒルデもエルヴィンに打ち明けられていなかったのだろう。

今初めて残酷な運命を突き付けられて、エルヴィンは絶望した表情を浮かべている。

「そんな……どうにかならないのかい？ リーデル卿なら、きみのことを何より可愛がっているし、

娘であるきみの願いなら――」

「ええ、お父様は確かに私を深く愛していらっしやるわ。でも、無理なの。この結婚は王家からいただいたお話だから」

リーデル伯爵たちが拒むことができないのは、王家から命じられただけではない。過去、行方不明になったヒルデを捜索する時に王家に協力してもらったからだ。

彼らは国境警備のために強い軍事力を持つ辺境伯を警戒しており、監視の意味も込めて、王家に忠誠を誓う貴族に縁を結ばせたかったらしい。恩のあるリーデル伯爵家はちよどよかったのだろう。

「だからごめんなさい、エルヴィン……あなたの気持ちには応えられないの。お姉様とどうか幸せ

になつて」

「そんな、ヒルデ……こんなの、あんまりだ……」

エルヴィンがしくしくと泣いているヒルデを抱きしめたところで、マリアはそつとその場を離れた。

いつそ駆け落ちでもするだろうか。

それとも諦めて義務を果たすだろうか。

二人がどちらの道を選ぼうと、マリアには何もできない。現実を受け入れるだけだ。

しかし、マリアの予想はどれも外れた。

「——お父様、本当ですか？ その、ヒルデが……王家から婚姻の打診を受けたと……」

「ああ、本当だ。隣国へ留学していた王子殿下が帰国なさっていてね。先日の舞踏会で、ヒルデを見初めたそうだ」

第二王子であるアロイスは二十歳の情熱的な青年で、ヒルデをその場で口説き、彼女が結婚できない相手だと知ると、直接父王に打診した。

最初は当然先約があるからと国王も突っぱねていたのだが、どうあつても諦める気のない息子の様子に折れるしかなかったらしい。王太子にはたいそう厳しいが、王妃に似た次男には弱いとの噂もあった。

そうなるヒルデの気持ちになるところだが、彼女は意外にも素直に受け入れたそうだ。

もちろん最初は戸惑っていた。相手のことなどほとんど知らないし、何よりヒルデが本当に愛しているのはエルヴィンである。

王子にいくら情熱的に口説かれようが心は動かない……と思われたが、アロイスは足繁くヒルデに会いに来ては愛を捧げたので、さすがのヒルデも申し訳なく思うようになったのかもしれない。王子と結婚すると伯爵夫妻に告げたのだ。

「あの子に妃の役目が務まるか少し不安ではあるが、まあ、何とかなるだろう」

「ヒルデは明るくて優しい子ですもの。アロイス殿下だけでなく、他の方々とも上手くやっていますわ」

ヒルデが嫌がっている様子ではないことに、伯爵たちは安堵したようだ。

マリアもヒルデには不幸な目に遭つてほしくなかつたので、急な話ではあるけれどよかつたと思つた。エルヴィンの心中を思うと複雑ではあつたが、それはそれとして、もう一つ気になることがあつた。

「では、カリウス辺境伯との結婚は白紙になったということでしょうか」

王家にとつて、ヒルデを辺境伯に嫁がせることには重要な意味があつたはずだ。

(誰か別の人間を嫁がせるのかしら)

マリアがそんなふうと考えていると、伯爵とヨゼフィーネが何か言いたげに自分を見ていることに気づいた。

(まさか)

「マリア。辺境伯には、お前が嫁いでほしいんだ」

王家は、マリアも伯爵家の令嬢だから代わりに辺境伯に嫁ぐよう命じたという。

「でも……わたしは、お二人の本当の子どもではありませんわ」

孤児であるマリアが嫁いでも意味がないのではないか。

やめた方がいいのではないかと不安がるマリアに、伯爵は難しい顔をして答える。

「それはそうなんだが……もともとこの話は王家が打診したものだ。花嫁が代わっても、カリウス辺境伯が私たちに文句を言うことなどできない。それに血が繋がっていないなくても、お前は伯爵家の娘なんだよ」

夫の言葉に同意するようにヨゼフィーネも頷く。

「そうよ、マリア。あなたも私たちの可愛い娘。辺境伯様も納得してくださるわ」

「王家寄りの人間が向こうへ嫁ぐことに意味があるのだから、そこまで気にする必要はないだろう」

「でも……」

マリアに政治の話はよくわからない。しかし歴史の授業で、王侯貴族の血がいかに重要かは学んできたつもりだ。

平民である自分が差し出されて、それで本当に牽制になるのだろうか。

(むしろ怒りを買ってしまうんじゃない……)

「あちらは……カリウス辺境伯はどこまでご存じなのでしょうか？」

マリアの問いに、二人は顔を見合わせて黙り込んだ。

不安な顔をするマリアに、伯爵は慌てて言う。

「いや、その、実はまだ、事情を説明していないのだ。なにぶん、急な話だったからね」

「では、きちんと了承を得た上で婚姻の話を進めた方が——」

「それはその通りなのだが、この話は王家が主導で進めているからね……私も強く意見することはできないんだ」

どうやら花嫁が代わることは、マリアが辺境伯家へ嫁ぐ数日前に告げるようだ。

(そんなことして大丈夫なの?)

揉め事に発展するのではないかとマリアは不安で仕方がない。

「本当に大丈夫なのですか？」

「まあ、何とかなるさ」

(そんな……)

どこか突き放したようにも聞こえる物言いに、マリアは呆然としてしまった。

そして何とか二人の考えを変えたい——辺境伯家へ嫁ぐことを回避したいと必死に頭を働かせる。

「もし……わたしがあちらへ嫁いだら、リードル家の跡継ぎはどうなるのでしょうか」

婿養子となったエルヴィンとの間にできた子どもが跡を継ぐまで、マリアとエルヴィン、そして伯爵夫妻がこの家を守っていくものだと思っていた。

「ああ、それなら心配しなくていい。親族の中で当主に相応しい男性に継がせればいいだけだから

ね。それか、ヒルデとアロイス殿下の間にできた子の一人に継いでもらう方法もある」

伯爵は実にあっさりと答えた。

まるで自分が必要ないと遠回しに言われている気がして、マリアは傷つく。  
(それなら、わたしは今までいったい何のために……)

エルヴィンとの関係に悩み、壊れないような心を碎いていたことが無意味に思えて、虚しさに襲われる。

「マリア、あまり真剣に考えすぎるのもよくないわ。もつと気楽に考えなさいな」

ヨゼフィーネの励ましも、どこか他人事のように聞こえた。

いや、彼らにとっては他人事なのかもしれない。

「あなたはヒルデに似てとても可愛いから、きつと辺境伯様も気に入ってくださるはずよ」

「ああ。ヒルデに似ているから大丈夫だ」

言葉を失うマリアに止めを刺すように二人は告げた。

「マリア、頼む。我が家を救うためだと思って、嫁いでくれないか」

「ヒルデも王家のために結婚するわ。あなたにもどうか、同じ役目を担ってほしいの」

二人の纏るような眼差しに、孤児院で初めて会った時のこと、自分たちを本当の両親だと思って呼んでほしいと言われた時のことを思い出す。

マリアは何とか声を振り絞って告げた。

「……はい、わかりました」



辺境伯家へ嫁ぐと決まった日から慌ただしく支度が始まり、マリアは気づけば馬車に乗せられていた。

『マリア、私のせいで本当にごめんなさい。辺境伯様にもそう伝えて』

見送りの日。ヒルデが涙ながらにそう言って、マリアを抱きしめた。

婚約者であるエルヴィンにも本当なら直接会って別れを告げるべきだったのだろうが、彼の心はヒルデにあるので、わざわざ会う必要もないかと思ひ、手紙で済ませた。彼の他にも、付き合ひのあった友人や孤児院の子どもたち、ザムエル宛てにも手紙をしたためた。

突然こんな形で別れることになり、申し訳ない。今までよくしてくれてありがとう、と。

(本当に、突然よね……)

マリアの気が変わらぬうちにと考えたのか……いや、恐らくアロイスとヒルデが結婚することを辺境伯に知られて抗議される前に、と考えた結果だろう。

騙し打ちのようにして嫁いで向こうの機嫌を損ねてしまったら、それこそ亀裂が生じるのではないか。

マリアはもう一度そう述べたのだが、伯爵は大丈夫だと答えた。

『伯爵家の娘を嫁がせると言ったのだ。嘘ではない』

リーデル伯爵も王家も、カリウス辺境伯のことをどこか下に見ているようだ。言葉の端々に、どうともなるというような雰囲気伝わってきた。

(……わたしの存在自体が、カリウス辺境伯たちを不愉快にさせないかしら) いったいどんな顔をして会えばいいのだろう。

ヒルデならこんな時、天真爛漫てんしんらんまんに笑って上手くやるのではないだろうか。(でも、わたしはヒルデじゃない。きつとそんなふうにはできない)

そう思うけれど、上手くやらなければ伯爵家と王家、ひいては国全体に迷惑をかける可能性がある。

長い旅路の中、マリアの心は重圧に押しつぶされそうになっていた。

「——お嬢様、そろそろ到着みたいですね」

付き添いのメイドの解放感を滲ませた声に、マリアは読んでいた本から顔を上げた。

同乗しているメイドの他にも伯爵家からついてきた使用人や護衛騎士がいるが、彼らはマリアとカリウス辺境伯が結婚式を挙げた後、王都へ帰る予定だ。

誰も残るとは言ってくれなかったのが、仕方がないとはいえ、寂しく感じた。

「わっ、すごい！」

メイドが窓の外を見て、興奮したように言っている。それにつられてマリアもそちらに視線を向けた。

カーテンを少し開けた先に、いかにも年季の入った堅固な建物が見えた。周りの自然豊かな——どこまでも深い森が続いているような濃い緑の景色も相まって、ひと昔前の異国に迷い込んだような錯覚おちいに陥る。

(あれが、カリウス辺境伯の城……)

エーレンベルク国の北東部・国境地帯を治める領主の城だ。周りは森に囲まれており、城に向かってどんどん地面が高くなっている。

戦乱の時代は隣国から攻め入られることも少なくなかったらしい。城を落とされれば、この領地は敵のものになり、王都への攻撃の足掛かりとなる。だから、この国にとって最後の砦がこの城なのだ。歴史を鑑かんがみれば、物々しい外観にも納得できる。

跳ね橋を渡ると、領主や使用人たちが普段生活しているだろう館の入り口で馬車が止まった。外へ出たマリアは辺りを見渡して、そっと息を吐く。城のあまりの巨大さに心細さが芽生え、途方に暮れたような気持ちになった。

(まるで孤児院からリーデル伯爵家へ来た時と同じね)

「ようこそお出でくださいました。ジークハルト様がお待ちでございます」

馬車の近くで待機していたのは家令と思われる老齢の男性だった。年下であるマリアにも慇懃いんぎんに挨拶して、中へ案内しようとする。

彼の他には数人の使用人しかいなかったもので、恐らくあまり歓迎されていないのだろう。そう思っていたマリアは、中へ入り息を呑んだ。

長い廊下の両端にずらりと並ぶ使用人に、厳つい甲冑や騎士の隊服を着ている男性陣。思わず怖気づいてしまうほどの迫力がある。マリアが前を通りすぎるとそれに合わせて頭を下げてきたので、さらに恐縮してしまった。

居たたまれない気持ちから自然と早足になり、すぐに大きな扉の前まで到着する。まるで王の謁見の間だ。

いや、この土地の人間や城に仕える者たちからすると、彼こそ王なのだろう。

(ああ、あの方が……)

扉を開けた先に見えた赤い髪の男性が、カリウス辺境伯なのだと思った。

ジークハルト・カリウス。

二十五歳という若さで辺境伯家の当主となり、今年で二十九歳になる男性。国境地帯を治めるとあれば苦労がつきものなのか、実年齢よりも上に見えた。

遠目からも威厳が十分に感じられて、琥珀色をした眼光の鋭さが狩りをする動物を思わせた。

金糸で装飾が施された黒地の上衣とトラウザーズは恐らく騎士団の制服だろう。それは、彼をより厳格で恐ろしい人物に見せている。

顔立ちのせいなのか、それとも歓迎していないからか、ジークハルトはマリアを睨んでいるように見えた。

(ま、まずは、挨拶しないと)

相手がどう思っているにせよ、こちらに敵意はない。歩み寄る姿勢を見せるのは大事だ。

しかしここに来て緊張が最高潮に達したのか、スカートの裾を掴む手が震えてしまう。

「あ、わ、わたしは……」

ジークハルトの両隣には彼の家臣が控えており、マリアがおかしな行動をしないか目を光らせていた。その容赦ない視線でさらに心臓の鼓動が速まり、頭の中が真っ白になる。

(どうしよう、どうしよう……)

泣いたらますます恥を晒すだけなのに、自然と目に涙が浮かぶ。

その時だった。

「遠いところからよく来てくれた!」

大きくてよく通る、そして明るく浣刺とした声に、マリアは驚いて顔を上げた。

壇上に座っていたジークハルトが、マントを翻しながら真っ直ぐこちらへ向かってきている。

(え、え……ジークハルト様の方から近づいてきてる!?)

動揺する間に、彼は長い脚であつという間にマリアの前まで来た。

「あなたがここへ来てくれたこと、我が家臣一同、深く感謝している。これからよろしく頼む」

ポカンとするマリアの手をジークハルトはそつと掬い、触れるような口づけを落とした。

そしてこちらを窺うように上目遣いになり、ぎこちなくも微笑みかけてくれる。

マリアの心臓が大きく鳴った。怖そうだと思っていただけに、優しい笑顔がやけに眩しく感じて目を奪われる。

「改めて、あなたの名前を覚えてくれないだろうか」